



ルーシー・ワースリー (著),

中島俊郎/玉井史絵 (訳)

『イギリス風殺人事件の愉しみ方』

Lucy WORSLEY,

trans. by Toshiko NAKAJIMA and Fumie TAMAI

*A Very British Murder*

(300 頁, 東京: NTT 出版,

2015 年 12 月 25 日, 本体価格 3,600 円)

ISBN: 9784757143296

(評) 三宅敦子

Atsuko MIYAKE

うな重や寿司屋のメニューには、たいてい松竹梅という区分が設けられている。松を頼めば懐が痛むが、梅ではわざわざこの店に足を運んだ意味がない、まあ竹あたりを頼んでおこう、というお客は結構いるだろう。それなりに選択肢はあっても、結局はみな当たり障りのない同じ選択肢に落ち着いてしまうのである。同じ現象が大学業界でも発生している。文科省の指導によって特色を出そうとしてもなぜか右に倣えになるため、大して変わり映えない日本の大学は、親切な予備校によって偏差値というツールにより見事に序列化されている。その序列を松竹梅という区分で表現するなら、竹に分類されうる中堅私大の文学部英文学科に勤務する筆者が、最近悩まされていることがある。それは、ごく少数の本好きを主張する新生者が決まって、「特にシャーロック・ホームズなんか大好きです」と言うことである。彼らの「特に」に特に意味はない。英文学の作品としてはそれしか読んだことがない、と言う程度の意味である。文学史の授業を担当しているが、「シャーロック・ホームズは授業で取り上げられますか」と、毎年尋ねられる。英文学の授業で推理小説や児童文学など、まったく論外であるという雰囲気の中で学生時代を送ったためか、こういう発言や質問を何も感じずに口にする学生を目の当たりにすると、どう反応するべきか少々面喰ってしまう。年のせいで少々頭が固くなり、時代の変化についていけなくなった筆者のような教員に、この本は素晴らしい回答を与えてくれる。「殺人」という視点で見れば、シャーロック・ホームズは立派に、イギリス文学の大御所であるド・クインシーやディケンズの系譜に繋がる英文学作品なのである。

著者紹介によれば、著者のルーシー・ワースリーは歴史家である。文学研究者はしばしば、歴史書は数字や細かな話ばかりで砂漠のように味気ないと文句をつける。しかし本書は、著者が歴史教養番組の監修や主演を多く務めたという経歴のおかげか、娯楽として楽しく読める内容になっている。その理由の一つに本書が、2013年にBBCで放映された同名のテレビ番組とタイアップした形での出版になっていることがあげられるだろう。テレビの娯楽教養番組を視聴するような気持ちで、読むことができる。逆に、推理小説に関する本格的な歴史分析や、推理小説の内容に関する分析を期待する読者は、肩透かしを食らうかもしれない。本書の内容は、文化史家のジュディス・フランダースの著作を中心とした二次文献に依拠するところが多いため、推理小説や殺人事件の文化史に詳しい読者なら、既知の情報のパッチワークのように思える箇所が多々あるだろうと思えるからである。

では本書の新鮮味、言い換えるとオリジナリティは、どこにあるのか。それは「消費」という切り口にある。料理に喩えるなら、キュウリやジャガイモといったありふれた材料を、新しい調理法で料理してみた、と言えるだろう。「序」で著者が述べるように、「いかに英国民が殺人事件を愉しみつつ消費していったか、つまり一九世紀初頭から今日まで延々と続く殺人にまつわる現象を追求することこそが本書のテーマ」(2)である。過去に実際に起きた殺人事件が、ブロードサイドや作家のエッセイや小説に取り上げられる、という文学研究者にはおなじみの消費の仕方も登場する。しかし、殺人事件の「消費」というテーマを一番よく、かつ楽しく理解できる章は、第4章と第8章であろう。

第4章で扱われている「エルストリー殺人事件」は、賭けボクシングの試合を賭博の対象としていた仲間内で、1823年10月23日に発生した事件である。犯人たちは殺害した被害者の遺体を池に隠して、被害者の財産を頂こうと目論んだ事件であった。この事件は新聞記者の心をとらえ、『タイムズ』紙のみならずブロードサイドでも取り上げられた。とはいえ、メディアが伝えた裁判記録は、「娯楽性を最大限に引き出そうとしていた」(43)らしい。事件はその記事を読んだ大衆の心を虜にし、殺人が行われた家や遺体が投げ込まれた池など、殺人に関する場所を巡るツアーが登場した。ツーリストたちは殺人現場となった家の建材をはがして、生垣の小枝までも持ち帰ったらしい。まさに究極の消費である。

第8章で扱われる1827年に発生した「赤い納屋殺人事件」の消費方法は、もっとグロテスクである。村娘のマリアはウィリアム・コーダーという男性と、駆け落ちする約束をしていた。二人が密会の場としたのが「赤い納屋」である。コーダーはマリアを裏切り、殺害して遺体を納屋に埋めた。捕まったコーダーは絞首刑に処されたが、この事件では殺人犯の遺体すら消費される。判決文に従っ

て遺体は解剖され、皮膚は身体からはぎ取られなめして、コーダーの伝記の装幀に使用されたのである。頭部は散々見世物となった挙句、今は彼の故郷の「町の博物館の最大の呼び物のひとつ」(92)になっている。コーダーの殺害告白は、「マリア・マーティン殺人事件」という歌謡となった。1828年には誰もが知る歌となり、ロンドンのみならず、遠くスコットランドにも広まった。この歌は今でも口ずさまれているようだ。事件の当事者二人と殺人現場の赤い納屋は、暖炉を飾る陶器像となった。納屋の木材は売りに出され、靴型の小さな嗅ぎタバコ入れに加工されて、売られたらしい。大衆は殺人事件にまつわる、うすら寒い品々を身近において愉しんでいたのである。こういった物品は、本書の冒頭に数多く挿入された写真で確認することができる。レプリカの写真ではあるが、陶器製の赤い納屋は非常に牧歌的で、イギリスの土産物屋でよく見かける陶器人形となら変わらない。殺人事件の舞台がモデルになったことを聞かされなければ、うっかり買ってしまいそうな品である。生身の皮膚で装幀された本も、写真で見れば薄汚れた普通の古書にしか見えない。

こういった興味深い切り口が、「黄金時代」と題された第3部では、すっかり姿を消してしまうのは残念である。もっとも第3部が扱う時代は1920～30年代であるので、この手の際物が存在しないのは当然と言える。第3部で興味深い視点の一つは、殺人事件を扱う推理小説が女流作家と女性読者のものになっていく過程である。「シャーロック・ホームズの典型的な読者は通勤電車内で雑誌を読む紳士に限られていたが、一九二〇年代になると自動車通勤が一般的となり男性の読書時間は失われていく。そこで夫に代わり妻が女流作家の長編推理小説を図書館から借り出し、午後の読書を楽しむようになったわけである。」(210)このくだりの「そこで」という接続詞による論理的展開は、やや飛びすぎであると思うが、とにもかくにも読書という余暇が男性のものから、女性のものへと変質した。それに伴って推理小説の消費者が変わったのである。物質文化における殺人事件の消費方法も、室内装飾品からボードゲームへと変質する。黄金時代の推理小説に特有の「推理を一種のゲームとみなし、上流階級のカントリーハウスを舞台にする」という考えは、リーズを拠点とした会社ワディントンズが一九四九年に製作した、『クルード』というゲームに具現化(239)された。上流階級の探偵が登場する推理小説を執筆した黄金時代の作家たち(アガサ・クリスティ、ドロシー・L・セイヤーズ、G.K. チェスタトンなど)が所属した「探偵倶楽部」には、ロナルド・ノックスのいう「十戒」という、推理を打ち立てる際にクリケットのルールのように、厳格に守らなければならないルールがあった。しかし社会のリベラル化と同時にこういった推理小説の黄金時代は終わりを告げ、スリラー小説、スパイ物語、アメリカが生みの親であるハードボイルド小説の時代へと突入し

ていく。

殺人事件や推理小説には欠かせない探偵への言及もある。1860年に起きた「ロード・ヒル・ハウス殺人事件」は、それ自体があたかも推理小説であるかのように消費された事件であった。なぜなら膨大な数の一般人が、あたかも探偵になったかのような気分で、自分なりの推理を警察や内務省に書き送ってきたからである。黄金時代の探偵がそれ以前の探偵とどう異なるのか、ということについても詳細が述べられているが、推理小説に関する書籍であるから、これ以上のネタバレは控えておこう。

また殺人事件が文学作品にどのように消費されたか、という視点の記述もある。具体的にひとつ例を挙げるなら、ヴィクトリア朝文学研究で一時期大ブームとなったセンセーション小説は、実際に起きた殺人事件を下敷きにしていた。例えばウィルキー・コリンズの『白衣の女』は、実際にフランスでおきた有名な事件から着想を得たものらしい。

このように19世紀を扱う第1部、第2部では、消費というテーマでわかりやすい分析が続く。それと比較すると、第3部で取り上げられた20世紀の推理小説の分析は、やや物足りない。もっともそれは仕方ないことなのかもしれない。なぜなら著者によれば、「アガサ・クリスティの諸作品はシェイクスピア、聖書についてよく売れた。だが、結局のところ黄金時代の推理小説は、イギリスの犯罪関連文化に影響力あふれる潮流を生み出したわけではなかった。髪が逆立ち鳥肌立つ恐怖の効果を読者に与えようとした『センセーション小説』こそが、後のホラーのジャンルを生み出したのである。ホラーはより強烈かつ刺激的であるためか、現在にいたるまで人気はいささかも衰えてはいない。一方、緻密に計算しつくされた黄金時代の推理小説のパズルは商業的成功を収めたにもかかわらず、行き詰ってしまった」(266)からである。

しかしこの主張には、いささか勇み足の観があるように思える。黄金時代の推理小説がイギリスの犯罪関連文化に影響を与えていないとするなら、なぜ、いつまでもポワロやミス・マーブルはテレビに登場し続け、人々に愛され続けられるのだろうか。テレビ番組化という視点で見れば、センセーション小説とアガサ・クリスティの小説を比較した場合、後者の方がずっと多いような気がするのだが、本場イギリスではそうではないのだろうか。推理小説の黄金時代である20世紀以降は、物質ではなく映像・イメージの世界へと消費活動が移って行ったため、本書の第1部や第2部のように物質文化という視点だけでは、影響力をとらえられなくなったのではないのだろうか。

最後の第24章にはヒッチコックの分析が登場する。しかしこの章が、非常に短く広く浅いという印象を与え、あたかも付け足しのように見えるのが、惜しい

ように思われる。第3部で、消費活動の対象が物質から映像・イメージへと移ったことに言及すれば、この章をもう少し本格的なものにすることができ、かつ、本書のオリジナリティである「殺人と消費」というテーマについて、その系譜に関してもっと深く切り込めたのではないだろうか。そうすれば第3部がもっとうまく、「消費」というテーマの中に納まったのではないだろうか。もしくは反対に、ヒッチコックをはじめとする20世紀の推理小説には言及せずに、著者が娯楽ビジネスとしての殺人の源流として、しばしば戻りたがる19世紀の話だけに限定したほうが、「消費」というテーマにフォーカスできたのではないだろうか。

もっとも、この少しばかり残念な印象を生み出すことになっている原因は、本書のよくできた構成にある。本書の原著タイトルの一部である“A Very British Murder”という表現は、ジョージ・オーウェルのエッセイ“Decline of the English Murder”をもじったものなのだろう。本書は推理小説黄金時代の終わりを嘆くこのエッセイへの言及で始まり、最後にまさにその黄金時代の推理小説で終わるという見事な円環構造になっている。本書評の冒頭で言及したように本書は研究書ではないため、殺人事件・小説に関係する様々な要素や視点が、ミックス・サラダのように混在している。それらを一つにまとめるためには、この円環構造はドレッシングとして大いに役立っている。

「あとがき」で著者は、「一八〇〇年以降、近代社会の発展に応じて、殺人にまつわる娯楽が利潤をもたらすビジネスとなっていく。探偵という人物が近代生活に欠くべからざる一存在となったという点で、ヴィクトリア朝と現代社会はしかと連動しているのだ。」(271)と総括し、過去と現在の関連性を読者に意識させる。連日のように報道される殺人事件のことを考えると、この視点は興味深い。殺人事件は今や、文学、映像の世界のみならず、オンラインゲームという一大産業でも大いに消費されている。関西のある地域では、推理小説好きな高齢の女性が、読書で学んだ手法で、結婚相手を次々に殺害するという事件さえ起きたが、本書によると、フィクション(推理小説)がリアリティ(殺人事件)に消費されるという方向性は、19世紀にも存在していたらしい。『ジキル博士とハイド氏』の上演で、二面性を持った主人公を非常にうまく演じた俳優が、同時期に発生した「切り裂きジャック事件」の新聞報道で、その演技力のために、まだ判明していない犯人と結び付けられてしまった。そのため、真犯人は「昼間は豊かな社会の一員で、夜間になるとホワイトチャペルの薄汚い通りを徘徊する外部者だ」(177)と、多くの人が信じ込んでいたというエピソードが、本書には紹介されている。

本書はこんな風に、非常に物騒になった日本において、19世紀のイギリスという時空を超えた世界について思いを馳せながら、居間でテレビ番組を見るような

気持ちで楽しめる書物である。殺人というテーマで、自分の日常とのつながりを見出したり、好きな推理小説作家を比較してみたり、英文学の作品を殺人という世俗的なテーマで眺めなおしてみたり、その時その時、その人その人なりの楽しみ方が見出させるであろう。